

第2分科会での検討過程で挙げられた第1分科会報告に関連する事項

1 「第2 これからの時代に求められる高等学校の魅力づくり」に関すること

第2分科会及び各地区部会における意見

- こどもたちの将来設計に資するよう、小学校の教育活動の中に、各高校でどのような学びができるのかといった内容を取り入れることも必要である。
- 全国募集も視野に入れながら、中学生のニーズを把握した上で、芸術文化、スポーツ、情報処理等のスペシャリストの育成に特化した高校に転換することも検討する必要がある。
- 全国募集の導入を検討する基準となる定員充足率を下回っていない高校であっても全国募集の候補校とするなど、導入範囲を見直すことも検討してほしい。
- ある教科・科目において高い指導力を有する教員の授業を全県に配信し、各校において教員が机間指導をしながらフォローするようなことなどができれば、学力の定着に向けて優れた実績を残せる可能性がある。
- 遠隔授業を実施する前に、教員が受信側の高校に足を運び、生徒とコミュニケーションを取った上で、遠隔授業を実施すると上手くいった事例もある。
- 遠隔授業では、教員が生徒に対して質問を投げかけたり、生徒が挙手して自分の意見を言ったりすることが難しくなる。
- ICTは活用の仕方次第では効果的であるが、様子が把握しにくいといった課題がある。
- 対面授業と遠隔授業で学力の定着に差が生じないようにする必要がある。
- ICTの活用を推進するに当たっては、現場任せにするのではなく、事前に教育的効果の検証を行った上で、研修機会の設定等により学校現場の教員に負担が生じないようにする必要がある。
- ICTの活用に当たっては、成功事例や他県における様々な事例を参考にしながら、メリット・デメリットをきちんと踏まえた上で、それぞれの教科の特性に合わせた効果的な活用を模索していく必要がある。
- ICTを効果的に活用しながら、基本的には対面授業により、教員と生徒が面と向かって授業をすべきであり、そのためにも、小規模校であっても、全ての教科の教員を配置し、対面授業をすることがベストである。
- ICT活用の推進に向け、全ての県立高校へICT支援員を配置する等、外部人材の活用について更なる充実が必要。
- 学校規模によらず、生徒が希望する教科・科目を学ぶことができるよう、遠隔授業により多様な科目を履修し、単位認定が可能となる環境を整備する必要がある。
- 重点校・拠点校という名称は、県教育委員会が今後もその学校を統合せず維持するという意思表示に捉えられかねず、中学生の進路選択に与える影響が大きいため、使用することは望ましくない。
- 高校標準法に基づいた教員数で不足する場合には、県独自に教員数を確保することが求められる。
- NPO等の外部団体と連携することで学校の魅力化につながり、地域を担う人財の育成が推進されると考える。外部団体の方を講師として活用するなど、様々な形で連携を進めてほしい。
- 教員が不足する中であっても、一定の採用基準を設けるなど、教員としての資質を備えた人物を採用し、教員の質が確保されるようにしてほしい。
- スポーツにおいては、指導力のある指導者を確保することで、競技力の高い生徒の県外流出を防ぐことができる。

2 「第3 これからの時代に求められる力を育む学科等の魅力づくり」に関すること

第2分科会及び各地区部会における意見

- 他校や他地域との差別化のため、地域の特性を生かした学科等の設置により、大胆な特色化を図る。

3 「第4 学校・学科の魅力づくりに向けた教育制度」に関すること

第2分科会及び各地区部会における意見

- 県立高校の入試の時期について前倒しできれば、生徒や保護者にとって早期に進路が決まることに加え、高校進学に向けた準備期間を長く確保できるというメリットがある。また、明確な目標を持っている生徒を対象に推薦入試を復活させることで、優秀な生徒や進学の動機が明確である生徒を早期に確保することができる。